

ヤマドリ 英:Copper Pheasant 学: *Syrnaticus soemmerringii*

1. 分類と形態

分類: キジ目 キジ科

翼長:	♂205-230mm	♀192-219mm
尾長:	♂415-952mm	♀164-205mm
ふ蹠長:	♂57-69mm	♀53-60mm
露出嘴峰長:	♂23-31mm	♀22-26mm
体重:	♂943-1348g	♀745-1000g

※ 計測値は、すべて亜種ヤマドリのもので、清棲(1978)による。

羽色:

亜種により羽色に違いがあるが、オスは上下面とも赤褐色味が強く、尾羽は黒、栗色、黄色、白色などの横縞模様がある(写真1)。南の亜種(アカヤマドリとコシジロヤマドリ)では、個体差もあるが、羽色が全体に暗くなり、尾羽も暗赤褐色と黒色の縞になる。最も南に分布する亜種コシジロヤマドリでは、腰羽の両弁が白色を呈する。メスは、キジの雌に似て全体的にめだたない褐色を呈しているが、灰褐色、赤褐色味も混じる。尾羽はより赤褐色が強く、先端に白色縁があるのが特徴。亜種アカヤマドリと亜種コシジロヤマドリでは、オスと同様に、他の亜種のメスよりも暗色味が強い。



写真1. 亜種ヤマドリのオス。

鳴き声:

ほとんど鳴かないが、警戒する際に小声でクックツと鳴いたり、キュッキュツ、キチッキツという甲高い声を出すことがある。雄はとくに繁殖期に翼を打ち鳴らしてドドドツと言う大きな音(ドラミング)を出して、接近する敵を威嚇する。

2. 分布と生息環境

分布:

日本固有種。本州、四国、九州に生息する留鳥で、積雪地域では、若干低地へ移動することもある。ヤマドリはオスの羽色や尾羽の特徴などから、これまで5亜種に分けられている。もっとも北に分布する亜種ヤマドリは、関西以北から青森県まで、シコクヤマドリは中国地方と四国地方に、ウスアカヤマドリは房総半島、伊豆半島、紀伊半島、山口県の一部、愛媛県および高知県の一部に、アカヤマドリは九州中部以北に、コシジロヤマドリは九州南部に分布する。また、北海道、淡路島、小豆島、佐渡島、隠岐諸島などに放鳥された個体がわずかながら生息している。

しかし、各亜種の境界線が明確でないこと、地域によっては分布が連続していることや個体群内での羽色変異が激しいことから、特に亜種ヤマドリ、シコクヤマドリおよびウスアカヤマドリの分け方は海外でも疑問視されることが多い。

また、アカヤマドリとコシジロヤマドリでは、特に腰の白色部の有無が決め手となる傾向があるが、両亜種の境界域では白色部のかなり少ないものが認められる(川路2004)。とくに後者は個体数が激減しているとして1979年に狩猟鳥からはずされた経緯もあることから、狩猟者、行政関係者の間でも毎年混乱が生じている。今後、

亜種分類が大きな問題となるおそれがあり、現在遺伝的な解析も進められている(Sakanashi *et al.* 2006)。

生息環境:

おもに森林に生息し、一般に広葉樹林を好むが、スギ・ヒノキなどの植林地にもよく出現する。ときに伐採跡地などの草原でひなたぼっこをしたり、砂浴びをしたりする。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
繁殖期						非繁殖期					

繁殖システム:

キジと同様に一夫多妻と思われるが(清棲1978)、実際には、野外で雄が長期間1羽のみのメスをしっかりガードして行動する姿もよく見られ、近年一夫一妻を示唆する論文も出された(高橋2011)。抱卵はメスのみで行い、ヒナの世話もメスが主体で行なう。関東周辺では、3月下旬頃にオス同士で飛び上がって互いに蹴り合うなどの激しい闘争が見られ、その後、メスを連れてつがいで行動するようになることが多い。

巣、卵:

大木の根元や倒木の下、林縁の草地の中などの地上に約20~30cmくらいの浅いくぼみをつくって巣にする。巣には樹木の葉、枯れ草などをわずかに敷いて産座にする。

一腹卵数は、通常7~10個である。サイズは、平均長径47.4mm×平均短径35.4mm、重さは平均31.9gで、一様な淡黄褐色をしている。

抱卵・育雛期間、巣立ち率:

抱卵期間は24日間程度で、孵化すると数時間で巣を離れ、親鳥とともに行動して、餌をとるようになる。孵化後2週間くらいである程度飛べるようになるが、数ヶ月間は、雌親を中心とする家族群で過ごすと思われる。野外で小さな幼鳥を見つけて接近すると、雌親が激しい擬似攻撃(威嚇)行動や偽傷行動を示すことがある。幼鳥は生後半年くらいで、尾羽もほぼ伸びきり、成鳥と区別がつかなくなる。その時期、複数の雄と複数の雌が混じった群れをときどき見かけるが、すべて同じ家族なのかは不明である。成鳥では、早いもので9月下旬にはつがいを形成するものもある。

4. 食性と採食行動

食性に関しては、ヤマドリが狩猟鳥であるため、狩猟期に捕獲された個体の胃内容物から検出された食物に関する調査例がある(小笠原1968, 小林1996, Kawaji & Yokoyama 2009)。それらによると、秋~冬期におけるヤマドリの食物はほとんど植物質で、シダやササといった緑色葉茎やブナ、ミズナラなどの堅果類、ヤドリギ、ジャノヒゲなどの漿果類などの果実が検出されている。筆者の分析した数十個体の嗦嚢(そのう)からも、冬期にもシダ類が多く見られた。そのほか特徴的なこととして、スギの実、落葉なども検出された。ヤマドリが人工植林地でもよく観察されるのは知られているが、そこを隠れ場所としてだけでなく、おそらく餌場環境としても十分利用していると思われる。

しかし、繁殖期における野外での食性はほとんどわかっ

ていない。人工養殖環境下では、ヒナや幼鳥にかなり動物質の餌を与えないと成長が遅れると言われている。採食時には、歩きながら地面をついばむ姿勢がよく観察されるが、シダなどの葉っぱを引きちぎる行動も見られ、やはり葉類を好食しているようである。またヤマドリギの結実期には、樹上にとまって実をついばんでいる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 狩猟捕獲数の減少と放鳥の問題

日本固有種でありながら、古くから狩猟種に指定されているが、近年、捕獲数が減少したことから、野外個体数の減少が懸念され、その回復策として養殖個体の放鳥が1973年から東日本や北日本を中心に各地で行われるようになった(図1)。しかし、放鳥個体の生存率などに関するモニタリングは、狩猟による足環回収を待つという消極的なものだけで、ほとんど成果は挙がっていなかった。放鳥個体の発信機による追跡により、季節や性によって生存率が異なることが判明し、それらを考慮したより効果的な放鳥手法が求められている(Kawaji et al. 2009)。また、ヤマドリは羽色、尾羽の形状などの特徴から5亜種に分けられているが、過去にその地域に生息していない亜種を放鳥したのではないかという疑惑があり、遺伝子汚染の観点からも問題が指摘されている。さらに、本来生息しなかった北海道、佐渡島などの島嶼にも放鳥された経緯があり、固有の生態系に何らかの影響をおよぼしているおそれもある(川路 2002)。

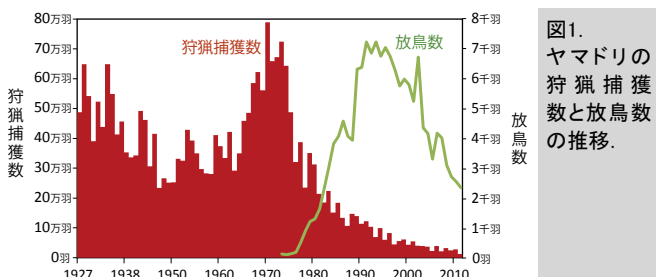


図1. ヤマドリの狩猟捕獲数と放鳥数の推移。

● 行動圏

これまでのキジ類のモノグラフなどでも、ヤマドリの行動圏に関する記述がまったくない。発信機を装着した結果によると、餌条件の良好な環境では、1年間を通して、約10ha程度の面積内で生活していることが分かった(図2)。しかし、大量の積雪など悪条件の生息環境では、かなり広い行動圏を有していると思われる。

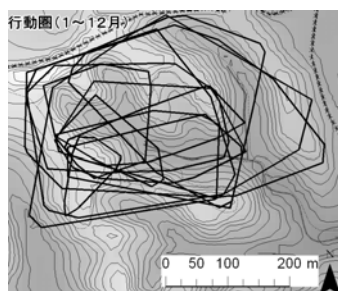


図2. ヤマドリのある1羽のオスの1～12月にかけての行動圏。

また、高木層の植生環境にはそれほど強い嗜好性は認められていない。冬期にはおそらくシダ類などの繁茂した環境を好んでいると思われ、生息環境としては高木層のみならず林床植生の重要性も指摘されている。

● ねぐら

通常、森林性キジ類の夜間ねぐらは、営巢中のメスのような特殊な期間を除き、樹上といわれている。これは夜間に接近する肉食性哺乳類などの捕食者から逃れるための手段と理解されている。

しかし、前記の発信機装着個体は、その調査地で地上をねぐらとしても利用していた(川路 2006)。地上ねぐらの環境は、林道から切り通し状になった急斜面を登り切ってやや平坦になった場所で、おそらく背面から襲われてもすぐに斜面を滑降して逃げることができるものと思われる。ヤマドリなど森林性キジ類は直接観察がかなり困難なことから、これまでねぐらなどの記録は極端に少ない。今後は発信機による追跡などで、さらに新しい生態的側面が明らかになることであろう。

6. 引用・参考文献

- 川路則友. 2002. ヤマドリの現状と問題点-狩猟鳥の個体群管理に向けて-. 山林(1415): 54-59.
- 川路則友. 2004. 九州のヤマドリ-狩猟による生死の分かれ目-. 森林科学 41: 54-58.
- 川路則友. 2006. ヤマドリ地上ねぐらの初観察記録. 日鳥学誌 55: 92-95.
- Kawaji, N. & Yokoyama, J. 2009. Food habits of the copper pheasant *Syrnaticus soemmerringii* in winter season. Bulletin of FFPRI 8(2): 127-132.
- Kawaji, N., Maruyama, T. & Yano, Y. 2009. Mortality of released captive-bred Copper Pheasants in a natural refuge area of Japan. Ornithol Sci. 8: 125-130.
- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京.
- 小林桂助. 1996. 台湾特産の高山鳥ミカドキジ *Syrnaticus mikado*. 鳥と自然(80): 1-6.
- 小笠原高. 1968. 冬のキジとヤマドリの生息環境と食性について. 山階鳥研報 5(4): 47-58.
- Sakanashi, M., Baba, Y., Kawaji, N. & Koike, H. 2006. Molecular phylogeography of a Japanese endemic, the Copper Pheasant. J. Ornithology 147(5) Suppl.1: 242.
- 高橋松人. 2011. ヤマドリの繁殖スケジュールと配偶システム. 山階鳥類学雑誌 43(1): 33-46.

執筆者

川路則友 独立行政法人 森林総合研究所

数十年前、鹿児島市に住んでいたおり、近郊の山の中で美しいコシジロヤマドリ(ヤマドリの一亜種)のオスに出会ってから、いつかヤマドリの研究をしたいと思っていた。ところがその後、本来ヤマドリの生息しない札幌に勤務地が移ってしまう。ヤマドリの研究をしたいという思いを忘れかけていたころ、知り合いが「弱ったキジ」を保護したと私に届けてくれた。それを見てびっくり。ウスアカヤマドリ(ヤマドリの一亜種)のオスであった。これは何かの因縁と思い、茨城県つくば市に異動したのをきっかけに、ヤマドリを追い続けて今日に至っている。最近とみに足がおぼつかなくなるのを自覚しつつあるので、急斜面をヤマドリのごとく駆け上るような元気のいい若手研究者の登場を切に待ち望んでいる。どなたか、ぜひ一緒にヤマドリを追っかけませんか? 楽しいですよ。



男女群島, 男島にて。